広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	作曲家テオドラキスの詩の選択 ： ジョージ・シリミス『テオドラキス、アナグノスタキスを引き受ける』より
Author(s)	土居本，稔
Citation	プロピレア , 25 : 87 - 88
Issue Date	2019-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048248
Right	Copyright (c) 2019 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

発表要旨

作曲家テオドラキスの詩の選択

――ジョージ･シリミス『テオドラキス、アナグノスタキスを引き受ける』[1)]より――

土居本　稔

共産主義者のヤニス・リッツォスの詩である「エピタフィオス」を 1959 年に発表したことで、批評家や聴衆はテオドラキス自身の信条に近い詩だけを使うことにより、目的を達成するのだろうと考えた。しかし、彼のこの後の詩の選択は、イデオロギー的な一貫性にいかなる程度にも特徴付けられなかった。

テオドラキスが 20 年に近い期間、レベティカ音楽の様式と左翼の主張に忠実なままでいたあいだ、彼の詩の選択の仕方は、時として逆に直観的であるように思われた。

そのあいだに、テオドラキスは政治的には対極の立場にいる、セフェリスとエリティスの詩にもとづく作品を作曲した。これらの作曲は、テオドラキスの聴衆に、彼と詩のあいだにあるイデオロギー的な相違をある程度まで麻痺させた。

これを説明する助けになる要因がふたつある。

まず、その時にこれらの詩の代わりになる音楽的な翻案がほとんどなかったこと、そして、異なった解釈のあいだにある潜在的な不一致を浮かび上がらせることは稀であった。

より重要なことに、この時に最も広まった要因は、叙事詩と抒情詩とのあいだの対照であった。この論争は、その嵐の中で以下のような多くの言葉を巻き込んだ。「エリート主義/大衆主義」、「個人主義/全住民参加」、「男性的/女性的」、「右翼/左翼」、「国家主義/世界主義」、「ギリシア的/国際的」、そして「政治学/美学」である。

これらの用語、さらに多くの他の語は、復し得ない対立となった。例えば、以下のことに留意する価値がある。すなわち、同じ用語がリッツォスの「エピタフィオス」(1959)のテオドラキスの作曲に当てはまるとしても、明示的にはマルクス主義者の詩人の伝統的な言語や様式の過度の改変、一連の作曲への議論はその詩文の政治性に手を付けないで避けたままにした。

そしてマリノス・アナグノスタキスの抒情詩に作曲したことにより、テオドラキスは共鳴する C.P.カヴァフィスに一体化できたと説く。テオドラキスの作曲対象の詩の変遷について、シリミスが解き明かす仮説の紹介を行なった。

---

1) George Syrimis "*Theodorakis Takes on Anagnostakis Reinventing the Lyric*"- *ManolisAnagnostakis Poetry and Politics, Silence and Agency in Post-War Greece* - edited by Vangelis Calotychos, Fairleigh Dickinson Univ. Press, 2012